「復土」 都市の日常で土を踏み、五感で感じる道

森のような復土イメージ

【コンセプト】

都市生活における身体感覚を刺激する体験

美術館等文化施設が連なるミュージアムロードにおいて、それらをつなぐ道自体をも全体をつなぐひとつのアート体験として発展できないかと考えました。

都市の歩道は安全と効率のために均質化されました。しかし、その過程で、視覚的に街路樹や植栽帯を眺める以外の自然との対話を失いました。
本提案は、道としての安全性を確保しつつ、失われた自然との対話を、「足裏の感触」から都市の中心に呼び戻すためのアイデアです。

均質な舗装の一部を剥がし、土を露わにする「復土」によって、「地面の感触」と「季節の移ろい」を足裏から感じ取れる、身近な自然体験空間を創出します。土や砂利、草など多様な感触が足裏に伝わることで、利用者の歩行体験と身体感覚を豊かにすることを日常に取り戻し、ふみ心地の変化による意識の覚醒が、周囲の環境を発見するきっかけともなります。

春：草木の萌芽が美しい
夏：そこを歩くのが涼しい
秋：落葉を踏む感触が楽しい
冬：日差しが暖かい

地面の整備といえば舗装することが一般的であり、その舗装材を何にするかという選択が行われてきました。
そういった状況だからこそ、あえて舗装しないということの意味が相対的に高まり、新たな文化の創造につながると考えます。

「復土」 都市の日常で土を踏み、五感で感じる道

見るものから体験するものへ

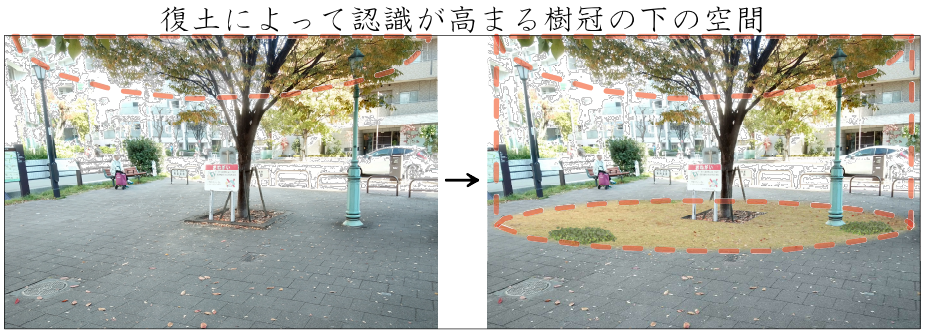
「復土」によって植栽の配置に制限がなくなれば、等間隔に並んだ街路樹や植栽帯を見るという体験だけでなく、様々な空間体験として自然と触れ合うことも可能です。

開けた空間

列柱空間

木々の間を縫う

復土によって認識が高まる樹冠の下の空間



復土の範囲

バリアフリーや車いす利用想定など、必要な部分の舗装は残し、それ以外の部分で復土を検討します。

環境教育

子どもたちが土や落ち葉の感触、雨による地面や草花の瑞々しい変化を直接体験でき、自然の楽しさを発見することになります。その体験が、公園、寺社、登山など、より大きな自然に足を運ぶきっかけとなれば、日常生活空間に「復土」を取り入れる意義があると考えます。
また、周辺施設での体験と併せ、自然の営みの体験も加えることで、多くの、しかも様々な学びを得ることになります。

豊かな歩道空間

歩行者のための十分な広さを確保しながら、間延びしない、豊かな歩道空間をつくることができます。

樹木の根による舗装の破損が起きない

樹木を囲う舗装がなければ、その破損によって美観を損なうこともなく、限られた根鉢部分で根が窮屈に見えることもなくなります。

持続可能な発展にむけて

このアイデアが発展していけば、ヒートアイランド現象の緩和等を目指した、建築の壁面や屋根の緑化と同様に、環境負荷が低く、生態系に優しい歩道モデルにつながることも考えられます。

開けた空間の復土イメージ

「復土」 都市の日常で土を踏み、五感で感じる道

エリア全体を統一するコンセプト

舗装に対する提案は、家具や上屋、アートの設置等、さまざまな他の整備と同時に行えつつ、随所で小さなスペースを見つけて整備を行うことも可能で、全体を通したコンセプトの統一を図ることができます。

経年変化

10～20年を見据えて、全てを一度に整備できずにエリアごとに随時進めることも、コンセプトを阻害するものではないと考えます。
また、それぞれの復土部分は、日当たりや風通し、保水状況により、時間をかけてそれぞれの植生状況に安定していくと思われます。
それまでの変化を見守るだけでなく、育てることに参加することも可能です

市民や地域企業の参加

必ずしも雑草全てを取り除かなければならないわけではないですが、不要な雑草等の除去や植樹を、アートをつくる体験の一部と捉えて、地域のワークショップとして導入することも考えられます。
経年変化し、手入れが必要な性質を、アートコンセプトと捉え、市民参加による維持管理と結びつけることで、ポジティブな要素となります。
例えば、行政では舗装を撤去して土を充填するところまでを行い、樹や花を植える等を地域の方々や企業にご参加いただくことも考えられます。

落葉

舗装道の落葉は清掃の対象となりますが、土の上にある落葉は自然なものであり、美観を損ねるものにはなりません。

土の上・舗装の上の落葉

排水の考え方

土の上に降る雨は、そのまま地面に浸透していくことを考えられますが、舗装部分に降る雨が復土部に流れることは防がなければなりません。
舗装部の勾配を復土部と反対へ下る設計とすることや、舗装と復土部との境界に砂利や側溝を施すことが考えられます。

復土範囲の例イメージ